

編集後記

お風呂上がりに炭酸水を飲んでいて息子から、このシュワシュワはなに、と聞かれた。二酸化炭素だよ、とわたしは説明した。くうきにも二酸化炭素はたくさん入っているよ。

ことしの4月に潮干狩りをした。子どものときに家族で金沢八景にあって以来だから、30年ぶりとなる。インターネットで干潮時間と持ち物を調べ、セブンイレブンで次の日の入場券を発券した。千葉県の船橋三番瀬公園は暖かな快晴。帽子をかぶり、古靴下をはいて、熊手はレンタル。湿った砂を足で踏む。ジョワ、ジョワとした感触。ぐぐっと手を入れる。なにかが指先に当たる。アサリか、死んだ貝殻か、巻き貝やアオヤギだろうか。30年前と同じなかわからないけれど、宝探しは楽しくて、スマホを取り出して写真を取る時間も惜しいくらいだ。アサリの貝殻をもつ息子に話しかける。貝は海にとけた二酸化炭素で殻を作るんだよ。貝探しに飽きても、子どもは海でびしょ濡れになったり、海藻を見

つけて口にいれてみたり、春の砂浜を楽しんでいた。

5月の休暇は八ヶ岳で過ごした。まだ肌寒い夜には薪ストーブを点ける。小枝や薪が燃えて、曇ったガラス越しに火が動くのが見える。燃えるとうなるの、と聞く息子に、わたしは、二酸化炭素になるよ、と説明する。すると、そうしたら貝が成長して助かるよね、と嬉しそうに言った。私はそんな息子を微笑ましくみていたが、今、二酸化炭素濃度が上昇すると、貝殻が溶解することを思い出した。

本号では、前号に引き続き、ゲストエディターの奥住聡さん(東工大)とともに、特集・新惑星形成論として三篇の論文を掲載した。また、片岡章雅さん(国立天文台)の最優秀研究者賞受賞記念論文も掲載した。楽しく読みつつ、惑星形成理論の研究者の層の厚さを見せつけられた。自分が理論研究者だったらどんな研究をしようかと考えが巡る。(瀧川)